

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 藤森 弘子 印



学位申請者

畠山 浩子

論文名

日本語学校非常勤講師の職業継続の要因

—キャリア・アンカー（選択により見えてくる職業の価値）に注目して—

【論文の概要】

本論文は、日本語学校教師のうち大多数を占める非常勤講師、中でも長い経験を持つ教師を対象に、「日本語教師は食べていけない」と言われたりする厳しい待遇の中でも、日本語教師を続けている要因について、「キャリア・アンカー」という概念に注目し、教師のこれまでの経緯の語りから質的分析を試みるものである。構成としては、第1章序論では問題の背景、研究目的・設問、本論の構成を述べ、第2章で日本語学校を取り巻く状況を概観し、第3章で関連の先行研究を概観し、第4章において分析枠組み、第5章において研究方法を述べ、第6章～8章において分析結果及びその考察、第9章に総合考察、そして第10章において、結論と課題を述べている。

第1章は本研究の背景として、日本にある日本語学校と日本語学校教師の概要、日本語学校生あるいは日本社会から見た日本語学校の位置づけを説明している。研究目的は、日本語学校非常勤講師の職業継続の要因を探ることであり、そのための研究設問として、研究対象者のこれまでの経緯と様々な選択、選択の理由から読み取れる日本語教師像とその形成過程および要因、社会的な日本語教師像と非常勤講師の語りから見える日本語教師像との差異の3点を明らかにすることである。

第2章では、日本語学校の現状、日本語学校が置かれている背景についてまとめている。現状については統計資料を基に学校数、教師数、学習者数の推移を示し、近年はこれらが増加傾向であること、日本語学校の設置形態は、株式会社が多いこと、日本語学校修了生の進路としては、進学が7割以上（そのうちの6割が専門学校、3割が大学・大学院）といったこと等が報告されている。次に国の留学生政策、入国管理政策、日本語教師に関する政策提言、日本語学校の設置に関連する政策提言を整理して提示することにより、日本語学校非常勤講師の職業選択には、留学生施策等の国の政策が密接に関連していることを指摘している。さらに、日本語学校の存立が国の政策に強く影響を受けている一方で、政策のレベルでは日本語学校教師についての言及はほとんど見られないことを指摘してい

る。

第3章では、「日本語学校」「日本語学校教師」「日本語学校と各種政策との関わり」についての先行研究を概観している。まず日本語学校については、その概要を説明したうえで、悪質な日本語学校が社会問題化した後の設置基準の制定過程と審査認定過程、現段階での問題点などを示している。次に日本語学校教師については、教師の資質、日本語教師養成、日本語学校教師を対象とした研究や日本語教師像に関する研究を整理している。その上で、日本語教師養成の過程で、日本語学校非常勤講師の厳しい待遇を指摘するものはあるが、研究トピックとして日本語学校非常勤講師に絞った論考はほとんど見られないことがわかった。

第4章では、分析的枠組みとして採用したシャイン(1991)の「キャリア・ダイナミクス」および「キャリア・アンカー」という概念の説明と、この概念と質的研究の整合性などについて述べている。シャインの言う「キャリア」とは「人の一生を通じての仕事」を意味し、「キャリア・ダイナミクス」とは、人は仕事だけでは生きられず、仕事、家庭、自身との相互作用があるという概念である。さらに「キャリア・アンカー」とは、異なる環境に移る、選択に直面するといった時に湧き上がってくるその人の職業についての関心や価値であると定義している。その概念に基づき、調査協力者がどのような日本語教師像を形成していくのかを分析しようと試みる。

第5章では、調査協力者、調査協力者とのラポール、分析方法、分析手順について概要を説明している。調査協力者は日本語教師歴15年以上の日本語学校非常勤講師3名であり、調査者と同じ日本語学校勤務である。この3名に対し半構造化インタビューやメールのやり取りのデータをもとに3名のこれまでの経緯について、文章化、図式化、分析の手順などを示している。

第6章から第8章は、3名の調査協力者について、それぞれの分析結果及び考察が記されている。そこで述べられている日本語教師像は、「専門性をもった仕事であると同時に、経験を積むにつれ、勤務条件を自分で調整できる自由度の高い仕事」、「待遇は不十分でも、授業の進め方が比較的自由にできる、面白い仕事」、「自分のペースで仕事ができ、自分の希望に合う学校を選ぶなどして、長く続けられる仕事」といったものであった。

第9章の総合考察では、研究設問に答える形式で3名の日本語教師像の形成過程をまとめている。3名とも長く勤務を続けている状態になるまでに、様々な外的環境の影響を受け、それまでの日本語教師像や職業観がキャリア・アンカーとして働き、社会的状況との相互作用の中でキャリア・アンカーの変容が見られた。

日本語学校非常勤講師を続けられている大きな要因として、「勤務条件の選択の自由」がある程度与えられていること、経済的に余裕があることなどが指摘されている。社会的にこれまで指摘されてきた日本語教師像は「日本語教師の入り口としての基準」や「理想像としての日本語教師像」であり、本研究で明らかになった「自由度」や「やりがい」と

いった肯定的な項目は見られず、国の提言や先行研究では日本語教師の実態の一部しか捉えられていなかったことを指摘している。

第10章では、本研究の結論、意義、課題、及び提言が示されている。結論として、本研究の調査対象者（日本語学校に非常勤講師として長期間勤務している者）の場合、その継続の最大の要因は「勤務条件の選択の自由」であり、待遇的には不満がありながらも、仕事内容には満足をしていること、こうした「専門性をもちながらもパートタイムにとどまっている教師」によって日本語教育界の底辺が支えられていること、その一方で、国の政策レベルでは、日本語学校非常勤講師は待遇が悪いまま見過ごされていることを指摘している。

今後の課題としては、調査対象者を調査者の同僚以外、つまり他の日本語学校の教師へも広げ、より幅広い日本語教師像を抽出していくこと、また本論文では3名の語りの中から、勤務に至るまでの経緯だけを取り出したが、日本語学校の現状についての語りの部分をさらに分析することにより、日本語学校の実態も浮き彫りにできるのではないかという点を挙げている。研究方法の面では、語りの分析方法及び分析手順が妥当であったかどうかなど検討の余地があるとしている。最後に、このような研究結果をもとに日本語学校非常勤講師の待遇を含めたステップアップのための施策を打ち出していく必要性があることなどについても言及している。

【審査の概要】

本論文の公開審査は2019年7月22日（月）10時から本学中学会議室において約2時間実施された。審査委員会は、学外から文野峯子人間環境大学名誉教授、本学から藤森弘子教授（主査）、早津恵美子教授、加藤美帆准教授、宮城徹教授の5名で構成された。

はじめに畠山氏より本論文の概要についての説明が約50分にわたってなされ、その後、各審査委員との間で質疑応答が行われた。

本論文については以下の点において高く評価された。

第一に、これまでの日本語教育関連の研究ではあまり注目されてこなかった日本語学校、それも教師の側に着目し、さらに長期にわたって非常勤を続けている教師にスポットライトを当てている点である。実際、日本語学校教師の大部分はこの非常勤講師であり、非常勤教師なしでは成り立たないということを考えると、重要な研究であると言える。

第二に、畠山氏自身が同僚非常勤講師として勤務し、内部者（当事者）の立場と視点を生かして、通常では得にくい類のデータをインタビュー、その前後に頻繁に行われたメール等のやり取りを通じて多く収集している点である。これによって、調査対象者の様々な職業選択の経緯が明らかにされている。

第三に、日本語学校教師を取り巻く環境やその内情について、日本語学校、日本語学校で学ぶ留学生、そこで教える教師それぞれについて、歴史的経緯、政策的背景、経済的状

況など、広範囲にわたって統計データ、先行研究を分析し、まとめ上げている点である。これによって、本研究の対象者となる日本語学校非常勤講師の置かれた状況が明確化されており、この部分だけでも十分に読み応えのあるものになっている。

第四に、3名の対象者に対するインタビューデータを丁寧に分析し、TEM（複線経路・等至性モデル）という分析手法を用いて、さまざまな要因を考慮しながらひとつの職業選択に至る経緯を視覚化することを試みていることである。この視覚化の作業を通じ、読者は何が（どこが）職業選択にどう作用したかが明確に理解できると言えるだろう。

一方で、問題点として以下のような点が指摘された。

まず、畠山氏が鍵概念として導入したキャリア・アンカーについて、その理解、定義、本研究への適用方法が適当であったかという疑義である。シャイン（1991, 2003）が提唱している概念の確認、それを用いた国内外の先行研究の分析が論文中では十分に行われておらず、本研究で3人の対象者にみられたと畠山氏が主張するキャリア・アンカーの項目についてシャインの提唱するそれに合致した概念であるのか、またキャリア・アンカーを直接確かめようという形でインタビューが行われていないため、畠山氏の解釈に負い過ぎているのではないかといった疑問が複数の審査者から投げかけられた。

第二に、インタビュー方法に基づく収集データへの疑問である。同僚教師であるがゆえに、語れることとは裏腹に、対象者にはむしろ話しにくい点があったのではないか、本来ならもっと語られるであろう、そして職業選択に大きな影響があるであろう、家族関係の記述がなさすぎるのではないか、という指摘があった。

第三に、この研究結果から、何を結論として導き、さらに今後の日本語教育現場にどのように貢献させることができるかという点について、十分な論述がなされておらず、それまでの各段階での分析・考察に比べ、弱く残念であるという指摘もあった。

以上のように、研究手法、フレームワーク概念の扱い、今後への示唆の部分等において審査委員会から批判、疑問が指摘されたものの、それらは今後より深く研究を進めるためのコメントとアドバイスであって、本論文の評価を大きく損ねるものではない。また畠山氏のそれらに対する応答も、指摘を真摯に受け止めた上で、今後の研究の発展においてそれらに積極的に応えていくことを約束するものであり、審査における議論は建設的なものであった。

公開審査終了後、審査委員会は畠山氏より提出された学位請求論文が本学の博士論文審査基準を満たすものであると判断し、全員一致で、畠山浩子氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。